

き、院長に定め、修道院の管理をこの人物に譲り渡し、放棄した。

それから、主の受肉から 1136 年に初めてサルヴァネス教会を大修道院へと高めた。それで、ここで敬虔な生活が盛んになり、修道院が成長し、愛が燃え上がり始めた。それから、著名な人々や信仰深い人々が自らの財産や所有物から多くのものをここに贈与し始めたが、隣人ばかりではなく、遠隔の地方や海外の人々もいた。この修道院の敬虔な生活がこの世の諸侯らに知られぬことはなく、自らの魂の救いと贖罪のためにここに贈り物を送った。コンスタンティノープルの皇帝がこうした²³⁾。シチリア王で公のルッジェーロもこうした²⁴⁾。驚嘆すべき人物で、その聖性と信心で全世界に知られる伯ティボーもこうした²⁵⁾。永遠の祝福の名簿に登録され、主により信心の報いを得ていた他の人々もこうした。彼らの中で特に名を挙げて永遠の記憶に委ねられるべきなのはギヨームという名の貴族で富裕な人物で、200 マルクの銀を海外からサルヴァネス教会建設のために送ってくれた。彼の記念は祝福とともに我々の特別な友人・知人の間で周年ではなく、日々執行され、尊重されている。また、貴族で非常に豊かな人物であるロデーヴ市民のピエール・エブランが寝室を建て、この作業のために銀 100 マルクを提供した。彼の息子のエブランは食堂を建てた。

その後、時が経ち、世俗の人々の傲慢と他の多くの不都合のために、より良い、修道生活により適した、他の多くの利点があるように思われる別の場所に修道院を移転することを修道院長ギローとすべての兄弟は決定した。この場所は修道院から遠くなく、弩砲が飛ばせる範囲にあった。しかし、これは修道院の所有物ではなく、多額の対価がなければ所有され得なかった。これを聞き、教会建設のために 200 マルクの銀を送った上述のギヨームは、教会が建設されるこの場所が同額で購入されることを望み、そう指示した。そのようにされた。1000 スーの対価でこの場所はすべての付属物とともに購入されたが、敬虔な生活に非常に適した、美しく快い地所であった。それで、ここに彼らは新しい修道院を建設し始めた。前述の

盗賊騎士の回心と改革派修道院の成立（北館）

ピエール・エブランの息子で尊敬すべきロデーヴ教会の聖具係のピエール・エブランとその兄弟のギローが、以前のものよりも規模が大きく、美しさに秀でた寝室をこの場所に建てた。前述の教会の尊敬すべき聖職者のクラリウスのリシャールが食堂を建てた。彼らがサルヴァネス修道院の建設者・創建者であり、敬虔の徳により我々の友人・知人の中で第一の地位を占めるのにふさわしく、彼らの記念が見捨てられることはないであろう。シトー会が存続する限り、彼らが記念されず、荘厳な祈りが彼らのためになされないような日が過ぎることは一日もないからである。

労働により最初にこの場所を始めた人々は、地上の肉体が天上に魂を返すまで、聖なる生活において謙遜と服従のうちに留まっていた。兄弟のレラスのポンスは常により低い地位を選ぼうと努めていたが、より自由に修道院全体に生活の必要物を供給し、常に神の僕の僕となるように俗人の兄弟の衣服を着て助修士に留まり続けた。祝福された死により主のもとで休むまで彼はこのようにした。

この者は、

敬虔で、賢明で、控えめで、慎み深く、
節度があり、貞潔で、落ち着きがあった。

この世にある間は彼は奮い起こした、
自分の肉体の強さを。

8月の最初の日に彼はすべて肉なるものの道に入ったが、死んだのではなく、父たちのもとへ、死から生へ、労働から休息へ、追放から故郷へと旅立ったのであった。肉に生きる者たちはこの教会を自らの労働で設立し、今や栄冠を与えられ、自らの労働のシュロの枝を受け取った。我々はみな彼らの魂に恩義があるが、この場所に終わりの時までいるすべての者がそうである。彼らが労苦し、我々は彼らの労苦の実りに入ったのであり、彼らが種を蒔き、我々は収穫したのであるから。彼らが我々の祈りを必要としている以上に、我々は彼らの祈りを必要としているが、彼らの徳と執り

成しによって神はこの場所を常に導かれ、守られている。彼らの手本によりこの場所で騎士の身分の多くの者が主へと回心したが、そのうちの一人が上述したル・ポンの領主アルノーである²⁶⁾。この場所を贈与したのはまさに彼であり、後にここで平和のうちに休息した。他の多くの者はここで物的な武器を捨て、靈的な悪と戦うために靈的武器をとった。「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とし」、もはや人々に対して「剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」(イザ 2:4)。彼らのもつて「狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏し」(イザ 11:6)、「狼と小羊は共に草をはみ、獅子は牛のようにわらを食べ」(イザ 65:25)ることが実現されたからである。

その間に、兄弟らは神の称賛に余念なく、日々の労働に専心した。畑に種を蒔き、ぶどうを植え、新しい果実をつくった。神は彼らを祝福なさり、彼らは大いに増やされた。神は彼らの欲望を満たしてくださったが、彼らは自らの欲望に欺かれることはなかった。主は彼らが主の掟を守り、主の法に従うように人々の家を授け、多くの民の労苦の実りを継がせられた。

この場所の用地については日々我々は見ているので書くのを控えた。ここにいない者のためには、山々はそれを囲み、主は御自分の民を囲んでくださる(詩 125:2 参照)と述べるだけで十分であろう。物質的な建物について語るのは、日々新しくされているので余計だと判断した。古きものが壊され、新しきものが建てられ、慈悲深き神により、より良き状態へと絶えず変えられているからである。

靈的な事柄については、この家が堅固な岩(マタイ 7:25; ルカ 6:48 参照)、つまり主イエス・キリストの上に建てられていることが知られるべきである。七つの柱で建てられた家は雲を突き抜け(箴 9:1 参照)、星々を越えて、天上の裁き人の玉座に到達する。そこでは諸王の王で万物の主が王笏を握り、世界の手綱を制し、飛翔する戦車をしっかり導いている。家では大きな石、「生ける石」(1ペト 2:5)、希少な石が切られ、整形され、磨かれて

いる。これらの石で天上のエルサレムが、すべてが結び合う都（詩 122:3 参照）として建設されるのである。

この場所の初代院長はアダマールで、ここに6ヶ月生活した。第二代はデシデリウスで、8年間ここを率いた。第三代がギローで、支配の法により、17年間精力的に治め、修道院を多くの所有物で拡大し、ここで多くの善いことを成しとげた。なかでもノナンク修道院を創建し、そこで修道女らの敬虔な生活を育んだ²⁷⁾。彼は恩寵の年の1161年の9月17日に死去した。同年の10月に我々の院長ポンスが共同体全体の同意により後を継ぎ、副院長から修道院長を引き受けた。院長の順序では四代目である。彼はこれを書くように我々に命じた人で、我々が述べたことを見聞きし、文書に証言を与えてくれた。我々は彼の証言が正しいことを知っている。

だから、喜びなさい、善良な母であるサルヴァネス教会よ、祝賀し、歓喜しなさい。「あなたの天幕に場所を広く取り、あなたの住まいの幕を広げ、綱を伸ばせ」。「あなたは右に左に増え広がり、あなたの子孫は」山を「継ぐ」（イザ 54:2-3）だろう。あなたの神である主において喜悅し、雀躍しなさい。猪が山の頂を愛し、魚が川を愛する限り、蜜蜂がタイムから蜜を集め、蟬が露のしずくを常食とする限り、神として世々に生き、かつ治められる我々の主イエス・キリストの助けにより、あなたの名誉、あなたの御名、あなたの称賛が常にあり続けるであろう。アーメン。

レラスのポンスの回心に関する論考とサルヴァネス修道院の始まりの真の物語が終わる。

註

- 1) Verlaquet, P.-A., *Cartulaire de l'abbaye de Sylvanès*, Rodez, 1910.
- 2) 「荒れ野」の現実については、Berman, C. H., "The Foundation and Early History of the Monastery of Silvanès: The Economic Reality," ed. J. Sommerfeldt, *Cistercian Ideals and Reality*, 1978, pp. 280-318.
- 3) Barrière, B., "Les abbayes issues de l'érémisme," *Les Cisterciens de Languedoc*

- (*XIIIe–XIVe siècle*), Toulouse, 1986, pp. 71–105.
- 4) Baker, D., “Popular Piety in the Lodévois in the Early Twelfth Century: the Case of Pons de Lérans,” ed. D. Baker, *Religious Motivation: Biographical and Sociological Problems for the Church Historian*, Oxford, 1978, pp. 39–47.
 - 5) Duhamel–Amado, C., “Le miles conversus et fundator: de Guillaume de Gellone à Pons de Lérans,” ed. M. Lauwers, *Guerriers et moines: Conversion et sainteté aristocratiques dans l’Occident médiéval (IXe–XIIIe siècle)*, Antibes, 2002, pp. 419–427.
 - 6) Kienzle, B. M., “The Works of Hugo Francigena: Tractatus de conversione Pontii de Laracio et exordii Salvanensis monasterii vera narratio; epistolae (Dijon, Bibliothèque Municipale Ms. 611),” *Sacris Erudiri* 34, 1994, p. 274.
 - 7) バーマンは資金集めのために外部に向けて書かれたとしている。ロデーヴ司教区での崇敬については, Ferras, V., *Pons de Lérans: un cistercien occitan au XIIIe siècle*, Toulouse, 1979.
 - 8) Kienzle, B. M., “The Works of Hugo Francigena,” pp. 273–311.
 - 9) Baluze, E., *Miscellanea*, I, Lucques, 1761, pp. 179–84.
 - 10) Kienzle, B. M., “The Tract on the Conversion of Pons of Lérans and the True Account of the Beginning of the Monastery at Silvanès,” ed. T. Head, *Medieval Hagiography: An Anthology*, New York, 2001, pp. 499–512.
 - 11) Bourgeois, G., Douzou, A., *Une aventure spirituelle dans le Rouergue méridional au Moyen Age*, Paris, 1999, pp. 15–33.
 - 12) フィリップ1世の息子のルイ6世(1108–37)。
 - 13) ロデーヴ司教ピエール1世(1102?–42)。
 - 14) サン・ギレム修道院はギヨーム(ギレム)・ダキテヌにより804年創建。ギヨームの墓とシャルルマーニュから授けられた聖十字架の断片で有名。
 - 15) 初代サンティアゴ・デ・コンポステーラ大司教のディエゴ・ヘルミレス(1020–39/40)。
 - 16) モン・サン・ミシェル, サン・マルタン・ド・トゥール, サン・マレシャル・ド・リモージュ, サン・レオナルド・ノブラはサンティアゴ巡礼路の重要な拠点。
 - 17) ロデズ司教アダマール(1099–1144)。
 - 18) ロデズ伯リシャール・ド・ミヨー(1112–35)。
 - 19) silvanensisのsilvaが森, salvanensisのsalvaが救いの意味。この著作では一貫してサルヴァネスが用いられるが, 定着せず, シルヴァネスの名前が現在に残る。
 - 20) ケレースはローマ神話の豊穡の女神, 地母神。
 - 21) グランド・シャルトルーズ院長ギーグ1世(1110–37)。
 - 22) ヴィヴィエ司教区のマザンはもとは隠修士の集団で1123年にシトー会に加入, 南仏へのシトー会進出の拠点になった。初代院長ピエール・イティエの任期は

盗賊騎士の回心と改革派修道院の成立（北館）

1151年まで。

- 23) 東のローマ皇帝はヨハネス2世コムノネス（1118-43）。
- 24) ルッジェーロ2世（1101-54）。
- 25) シャンパーニュ伯ティボー4世（1125-52）は多くのシトー会修道院を創建した。
- 26) アルノー・デュ・ポンは1153年にシルヴァネスに隠遁し、数年後に死去。
- 27) ノナンクは1146年創建のシトー会女子修道院。1139年にシルヴァネスに寄進された土地の上に創建。

